

有人、以倭語舉問也、法師問誰、答、役優婆塞、法師思之、我國聖人、自高座下求之、无之、彼一語主大神者、役行者前呪縛、至于今世不解脫、其示奇表、多數而繁、故略耳、知佛法驗術廣大者、歸依之人、必證得之矣、○又見元亨釋書

○按ズルニ、元亨釋書小角傳ノ贊ニ、本文道昭ノ事ヲ載テ、此事年代少乖、故我不系本章トアリ、〔袖中抄六〕くめぢのはし略○中

行者小角夜鬼神をめしつかひて、水をくみ薪をひろはしむ、またがはぬものなし、あまたの鬼神をめして、葛木の山と金の御峯とに橋をつくりわたせ、我かよふ道にせんといふ、神どもうれへなげ、共まぬかれず、せめおほすれば、わびて大なる石八を運てつくりと、のへてわたしはじむ、ひるはかたち見にくし、夜かくれてつくりわたさんといひてよるいそぎつくる、行者かつらぎの一言主の神をめしとりていはく、なにの耻あればか形をかくすべき、おほそはなつくりそといかりて、呪をもて神を縛て、谷の底にをきつ、略○中

續日本紀、靈異記、居士野仲廉撰日本國名僧傳等に見たり、

〔本朝文粹九〕白箸翁

紀納言○長谷雄

貞觀之末、有一老父、不知何人、亦不得姓名、常遊市中、以賣白箸爲業、時人號曰白箸翁、人皆相厭、不買其箸、翁自知之、不以爲憂、寒暑之服、皂色不變、枯木其形、浮雲其跡、鬚髮如雪、冠履不全、人如問年、常自言七十、時市樓下有賣卜者、年可八十、密語人曰、吾嘗爲兒童之時、見此翁於路中、衣服容貌、與今無異、聞者恠之、疑其百餘歲人、然持性寬仁、未曾見喜怒之色、放誕慎謹、隨時不定、人或勸酒、不言多少、以醉飽爲期、或涉日不食、亦無飢色、滿市之人、不得量知其涯、後頓病、終市門之側、市人哀其久時相見、移尸令埋於東河之東、後及二十餘年、有一老僧、謂人云、去年夏中、頭陀南山、忽見昔翁居石室之中、終日焚香、誦法華經、近相謁曰、居士無恙、翁笑不答去、亦相尋、遂失在所、余轉聽此言、猶疑虛誕、然而梅生不